

キャベツ

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
コナガ	－	多	(1) 6月中旬の巡回調査では、産卵圃場率は平年より高かった一方、幼虫の発生は確認されなかった。(±) (2) 基準圃場(北上市成田)のフェロモントラップ誘殺数は平年より多かった。(+) (3) 7月の気温は高い予報。(+)
モンシロチョウ	－	多	(1) 6月中旬の巡回調査では、幼虫の発生圃場率は平年より高かった。(+) (2) 7月の気温は高い予報。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【コナガ】

- (1) 7月以降もコナガの発生は断続的に見られるため、定植時に薬剤処理をする。
- (2) 定植時に薬剤処理を実施した場合でも、圃場をよく観察し、発生状況に応じて防除を実施する。
- (3) 薬剤抵抗性個体の出現を回避するため、以下のことに留意する。
 - ①コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤、同一系統の連用を避け、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。また、ジアミド系殺虫剤の使用は1作型1回にとどめ、年間使用回数の削減に努める。
 - ②コナガは飛来性の害虫であり、ジアミド系殺虫剤の効果が低いコナガが本県に広く発生している可能性がある。このため、ジアミド系殺虫剤による防除を実施したにもかかわらず、コナガの幼虫が見られる場合には、他系統の薬剤により防除を実施する。

【ヨトウガ、ウワバ類、モンシロチョウ】

- (1) ヨトウガやウワバ類の幼虫は、成長するとともに食害量が多くなるので、若齢幼虫の発生が目立つ場合は、コナガ防除の際にヨトウガ、ウワバ類にも効果のある薬剤を選択する。
- (2) 7月以降はモンシロチョウの発生は断続的に見られ、寄生密度も高くなる。成長した幼虫は食害量が多くなるので、若齢幼虫の発生が目立つ場合は、コナガと同時防除を行う。